

本シンポジウムを聴講する機会を得た。シンポジウムでは、独立行政法人統計センター前理事長・統計数理研究所所長の椿広計教授によるオンラインによる個票データ利用の紹介、同センター・白川清美博士による匿名データの紹介に続き、お茶の水女子大学・永瀬伸子教授と首都大学東京大学院生で日本学術振興会特別研究員の柳下実氏による公的統計の個票データを用いた研究事例が紹介された。オックスフォード大学内外の日本研究者を中心に50名程度の参加者があり盛況であった。当日のプログラムについては、以下 URL を参照されたい。

<https://januarysymposium.github.io/programme.html>

なお、GenTime プロジェクトでは、統計センターが提供する日本の匿名データを利用するため、社会学部研究室内にデータセンターを開設する予定とのことである。日本の公的データには海外からも高い関心が寄せられており、今後はオンラインや匿名データを利用した海外研究者らによる研究も増えていくものと思われる。 (福田節也 記)

オックスフォード大学国際ワークショップ「東アジアの3世代同居世帯における生活時間とライフコース移行」

2020年1月10-11日にかけて、オックスフォード大学ナッフールド校 (Nuffield college) にて、同大学社会学部 GenTime プロジェクト (研究代表者: Man-Yee Kan オックスフォード大学社会学部准教授) 主催による国際ワークショップ「東アジアの3世代同居世帯における生活時間とライフコース移行 (Time Use and Life Course Transitions in Multigenerational Households in East Asia)」が開催された。本研究所からは、筆者の他、同大学社会学部に研究滞在中の国際関係部・余田室長が参加した。また、テーマが日本、韓国、中国 (及び香港) を対象としたものであったことから、永瀬伸子教授 (お茶の水女子大学) による結婚後の親子同居に関する分析や社会生活基本調査の匿名データを用いた夫婦の性別役割分業についての分析 (Ekaterina Hertog and Man-Yee Kan) や高齢者介護についての分析 (Kamila Kolpashnikova and Man-Yee Kan) など日本についての報告も多く寄せられた。筆者と余田室長は以下のタイトルで報告を行った。

Setsuya Fukuda, A Decade of Change? Trends and Determinants of Domestic Chores among Japanese Fathers in 2001 and 2010

Shohei Yoda, Multigenerational Living Arrangements and Marital Fertility in Japan: A Counterfactual Approach

なお、筆者はこのワークショップの後、1週間ほどオックスフォード大学に滞在し、GenTime プロジェクトをはじめとする同大学の研究者との共同研究について打ち合わせを行った。本ワークショップでの報告とその後の研究滞在は、英国 ESRC (Economic and Social Research Council) と AHRC (Arts and Humanities Research Council) とのジョイントコールによる日英研究協力グラントによる助成を受けた。プロジェクト代表の Kan 教授に感謝申し上げる。 (福田節也 記)